
またお会いしましょうか？

湯出 珠悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またお会いしましょうか？

【Nコード】

N9390X

【作者名】

湯出 珠悟

【あらすじ】

望んでいた大学への合格通知。これで晴れて大学生になれた、春がきたと喜んでいれば…本に埋もれていました。え？合格おめでとうございます？ええ、魔書師育成学校？^{ましょし}いやいや違うから！私はそんな学校に受験した覚えはない！

少し性格の歪んだ主人公の異世界ファンタジー

つまりこれが始まり（前書き）

初心者ながらに書き始める事となりました。残念ながら作者は初心者ですので描写や文法とか美味しいの？なみに下手でございます、更に展開もご都合展開的なものになるやもしれません。

努力はしていくつもりですがそういう下手なものは読みたくない！
というかたは全力でお逃げ下さい。

つまりこれが始まり

「憎い、何だが全てが憎い」

そして重い、凄く重い。私は現在沢山の本の中に埋もれていた。俯せに倒れていてその背に乗せるのはどっさりと本、本だと答える。それ程に本、本、本の数。

何をやったの？と笑う人がいるならば、何もしてませんと答えてこの本達を投げつけてやるだろう。それも角が当たるように狙って。

だって本当に私は何もしてないんだって！この数十分前の事を思い出す、私は自宅の玄関にいた。

その手に握られていたのは、私の第一希望だった大学の可否通知。そこ以外行きたくないと2浪して届いた封筒。ああもうこの厚さならありだな、と開いて飛び込んだ文字。

“合格”

春がきたあああ！と玄関で女を忘れたガッツポーズ、たからべ財部 りん凜はやりました。と浮かれて目に浮かぶ涙に視界が歪み、ごしごしと目許を擦ればここにいた。

『ここ』と言われて何処ですか、と言われて答えるならば私は図書館ですとしかいえない。私の背の何倍もある大きな本棚、それに

隙間なく埋められた本。

ぽかーんと口を開けて固まった心境を察して欲しい、いやむしろ察して下さいお願いします。

目許を擦って二度見をしたからね、けれど目の前に広がる光景は変わる事がなかった。そして、取り合えず夢だという結論に至りました。

へらへらと笑って早く覚めなきゃダメだなあとか言って、色々と混乱してたのが不味かったのかもしれない。

よし、目覚めようと何を思ったあの時の私。ゴンツと本棚に頭突きをかました。いや、いや、そのね？何回も言うけど混乱していたんです。痛かったら目覚めるだろうって、とにかく痛い事をしようって。Mじゃないよ、マジで。

ここからが重要、頭突きをした本棚じゃなくて何故か本だけがカタカタと震え始めた。そして勢いよく本だけが飛び出して、私に向かって落下していく本達。…そして冒頭に戻る。

ね？私は何もしてないでしょ？……すみません、嘘ついた。少しだけ原因を作っていたようです。

迷子犬ではありません

「けど、これはあまりにも酷い…重い」

フンと鼻息を荒くして両腕を震わせながらどうにか抜け出そうと奮闘する。流石に本に埋もれて餓死なんてのは勘弁して欲しい、というか人の気配のまるでないここならばそれもあるんじゃないかと背中がゾクリと冷たくなった。

静かな室内、室内にあるのは本棚ばかりでかなりの広さがあり天井も高い。ここは何処で、どうしてここに？という疑問や恐怖で叫びたくなる。けれどその前に体の自由を取り戻すべきだと下唇をぐっと噛み締めた。そしてまた腕をふるふると震わすこと、数分。

『……何をしているんだ？』

そう呆れたような声が上から降ってきた。聞こえた声、けれどその言葉は理解出来なかった。

ああ、えつと詳しくいえば意味は理解出来る。洋画でよくある日本語吹き替え、ああいう感じに意味だけは脳内に通るけど話している言葉はさっぱりわからない。なのに通じている不思議。

それでもとにかくは今の現状を変えたくて、パンパンと床を叩いて私は呻く。

「た、助けて…重い。」

『……。』

何だが私の語尾に常に重いがついてる、このままでは口癖になっちゃうよオモイ。頭上から溜め息がふうと吐かれて、パチンと手を打つ音が辺りに響いていく。すると突如背中の中の重みは消えて、はたと肩越しに振り返るも背中の中のし掛かった本は消え去っていた。

そう消え去っていたんだって。あんなに多く積もっていた本が、パツと最初から何も無かったように消えたんだよ、そりゃもう驚き。瞳を丸めて、固まっていると手首を掴まれた。

『珍しい事もあるな、あそこまで懷かれるとは。』

…懷かれる？え、何に？自慢じゃないが私は動物には嫌われるタイプだから。何もしてないのに吠えられちゃうんだよ、そういう時とか地味に泣きたくなる。

ぐっと掴んだ手首が引かれる。ちょっと痛いし、乱暴！声の持ち主が引き起こしてくれようとしてるだろうけど、これはない。どうにか自分でも足を奮い立たせ立ち上がると目の前には男。

それがただの男の人じゃないのだ、いや何て言うか、爆発すればいいのって位の美形。歳は20代後半あたりだろうか、短い黒髪に赤い瞳、目付きは鋭すぎず、形のいい唇。パーツ一つ一つが完璧といえるだろうか。語彙の少ない自分が恨めしい…、まあ頭悪くいうとすっぱー美人系の美形。ていうか赤い瞳って何？カラコン？

そこで私はハッと我に返る。っとと、まずはお礼じゃないか私。助けて貰ったならお礼。掴まれた俣の掌を失礼にならないようにゆっくりと外して頭を下げる。

「あ、有難うございました、貴方のお陰で助かりました。私は、」
『…ポチ。』

「そう、ポチです…ってはい？」

先に言っておくが断じて私はポチなんて名前ではない。なんだそれ、私は人ですよ、それは基本犬につける名前じゃないかなお兄さん。

私が反射的に顔をそちらに向けると兄さんは凄く驚いた様子で両目をこれでもかっつう具合で開いて私を見ていた。

指先をふるふると震わせながら伸びてくる掌には少しだけ恐怖を感じる。思わず一步後退すると、逃がさん！とばかりに両掌でガシツと肩を掴んだ。

「ひっ！ちょ、何……っ」

『ポチ！！やっぱり、やっぱり生きてたんだね…！ポチは必ず僕との約束を守ってくれると信じてた、…ポチ、ポチ！』

いやポチポチ、うるさい！久しぶりに家に戻ってきた迷子犬じゃないんだぞコラ！お兄さんは肩を掴んでガクガクと前後に揺らす、その顔に浮かぶのは満面の笑顔。瞳には薄く涙さえみえる。

何ていうか初めに聞いた声が無愛想なそれだったから、少し驚いた。

それでもこのままじゃあいけないな、この人はポチを探していて私じゃないんだから。何だか微妙にうっとしい…、ではなくて彼を無駄に喜ばせるのは良心が痛んだりする、気がする。

私は少し乱暴に肩に寄せられた手を払った、そうすると露骨に傷付きましたと眉尻を垂らして表情を曇らせる。

そして私の機嫌を窺うようにちらちらと送られる目線、…すっご

い犬っぽい。そっちの方が犬じゃないのか。
すうっと息を吸い込み、私を指差す。

「ワタシ、ポチ、チガウ」

何故か片言になった私を許して欲しい。

『オイ』は名前じゃありません

『…？何を言ってるんだい、ポチ』

「いや、だからポチじゃないんです」

『…、何を言ってるかわからない』

「だーかーら、私はポチじゃないんですって！」

なんでわからない！首を傾げた彼は、形のいい眉を顰めてしまう。そして爪先から頭の天辺まで品定めされているかのようにじつくりと私を眺めた後に口を開いた。

『…もしかして、ポチじゃない？』

冷え切った淡々とした声に何だが恐怖を感じて、黙ってこくこく首を縦に振った。そうすると肩から掌を離し懷から取り出した白い布、ハンカチだろうか。それで自分の掌を拭き始めた。

おい、何だ。その汚いものに触ったみたいなのは、殴ってやろうかな。腹立つ。

『それじゃあ君、何者だ？話してる言葉は何処のものだ。その場所の名だけを言いなさい。』

「えっと、ニホン。」

『「えっと、ニホン」？それがお前の村の名か？…知らないな。まあどうでもいいが。』

何だこいつ、さっきまで半泣きでポチポチ、愛犬みたく名前連呼しておいて勘違いとわかれれば急に口調が変わってるし、呼び方がポチ↓君↓お前、段々と適当になってるし。それにどうでもいいなら

聞くな！

苛立ちに拳を強く握り締めるも深呼吸を繰り返し、現状確認から始める。

「あの、ここは何処ですか？」

『：何だ？残念だがお前の言葉は理解出来ない、何を言っている？』

え。：わからない？でも私はこの、もうムカつくから犬っぽくクロ（仮名）にしてやる。クロの野郎の言葉は理解は出来ている、なのにこちらが話す言葉は理解出来ないの？

いやいや冷静に考えてみれば現状がまずおかしい。何で意味のわからん言葉が理解出来るの私。そしてどうしてこんな所に？

とにかく現在地を急いで知りたくて、体全体を使って地面を差して両腕を振り回して小首を傾げて、と体の動きで意志疎通を図ってみる。

けれど、美形野郎は鼻で笑い飛ばすと馬鹿だといわんばかりに薄笑いを浮かべる。

『何だ、踊っているのか？全く笑えないな。』

あ、殴ろう。今すぐ殴ろう。

『：ふむ。オイ、私の言葉はちゃんと理解出来ているんだな？』

ついにお前↓オイになった！ちょっと美形だからと思って調子に乗って、顔が良かったら全てが許されると思ってないでしょうね！ひ

くひくと口角が痙攣するのを感じつつも大人しく首を縦に振った。

『だとすれば、受験生か？』

受験生？の言葉に少し考え込む、確かに自分は受験生といえは受験生だ。2浪してますけどねー、その言葉にとりあえずは頷く。

すると、クロ（仮）は何やら腰に巻かれた茶色のポーチらしきものに指先を突っ込み、何やら銀に輝くバッチを持って近寄ってくる。そして再度手首を掴み、それを服に、…忘れていたけど今私の服装高校時代のジャージだった。

とにかくそのジャージの襟付近にそれを付けられる。抵抗すべきか迷うも害がありそうな訳でもないので流れに任せてジッとしていた。

顔を上げた、先程とは違う無表情で冷静な声で言った。

『ようこそ、ラッシュバルト学園へ』



ラッシュバルト学園。

四つの大陸に囲まれる様にしてその中心に位置するラム大陸、そこに存在するサブエール国。

その首都は学園都市といわれ様々の知識が集う場所。知識の大陸とも呼ばれ、各大陸から人が訪れ共に学ぶ。

その為立場を完璧な中立としており、停戦協定の場所としてよく選ばれる。

そしてその中でも一際有名なのが世界で唯一魔道書学園として名高いのがラッシュバルト学園。

このクロ（仮）がいうにはそのラッシュバルト学園に私はいるのだという。

因みに先程まで私が居たのは特別な部屋だったらしく、現在とはとりあえずそこから出て長い廊下を二人並んで歩いていた。

『そして元々この学園の基盤になったのは一人の魔書師《ましょし》でね、その人は偉大で美しく…』

その間に彼は延々とこの学園の創設についてを話している。

話を軽くスルーしながらも、度々出てくる単語。魔書師《ましょし》、って何。聞きたい事は山ほどあるのにこちらから話を通じないとは悲しきことかな、まずは理解も出来ず纏まらない内容を必死に頭へ詰め込む。

先程の説明によればここは日本じゃない、むしろ私の世界ですらない可能性がある。伊達に漫画やアニメを勉強中の息抜きと称してみていた私ではないのさ。

つまりは異世界トリップ…、え、そうなの？と自問自答しては体の動きが止まる。

『…?』

訝しげに見るクロ（未だ名乗らないし決定）の視線なんて気にしていられない。そうなると元の世界はどうなる？もしかして戻れないのかな。わからないけどだとしたら…、

「…どうしよう。」

『…どうした?』

ここにいれば家族には二度と会えないんだ、友達にも。更にいうならこれから先はどうする？

今はこのクロに言われるがままに洋風の廊下を進んでいるけど意志疎通も出来ないこの状況で不安はないの？というか本当に彼は信用出来る？

『…おい。』

不安はあるに決まってるし、信用出来るはずもない。自分を庇護してくれる人物は何処にもいないんだ、今誰に裏切られるかわからない。

『聞こえてるのか、おい。』

一人なんだ。さっと顔が青ざめる。一文無しで言葉の通じない、そんな自分を雇ってくれる場所なんてないだろう。私は、私は

『おい!』

「って、人が考えてるのに煩いから！殴る！」

『ご、ごめんなさい、ポチ！もう考え事の邪魔しません！』

……？

……あ、あれ、何この状況。

現状を説明するなら動きを停止していた私を心配してくれたらしく、クロは顔を覗き込んでいたのだけど苛立ちのあまり高々と右手を振り上げてしまった。

いやこれは私には下に弟がいてね、考え事をしてる時に耳元でよく騒ぐものだから、反射的というか、そこまで冷静を失っていたというか。

とにかくその次の瞬間、長い廊下で右手を振り上げた女（私）とそれに怯えるように私の足下屈んで頭を覆う男クロという奇妙な光景がそこにはあった。

しかも震えてるよ、ちょっと、あれ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9390x/>

またお会いしましょうか？

2011年11月4日11時07分発行